



二人の作曲家が到達した 世界の違いを浮き彫りに

取材文／森岡葉(音楽ジャーナリスト)

モーツァルト演奏・研究の第一人者として多彩な活動を展開している久元祐子。2016年から始まったソナタ全曲演奏会シリーズでは、ソナタ以外

の作品や他の作曲家の作品も織りまぜ、様々な角度からモーツァルトの魅力を探求している。

第5回目となる今回のテーマは、「ハイドンとモーツァルト」。冒頭のハイドンのピアノ・ソナタ第23番とモーツァルト19歳の作品K280を並べて聴くのは、実に興味深かった。同じへ長調の明るい曲想を、繊細なニュアンスに満ちた透明感のある音色で生き生きと奏で、モーツァルトのハイドンに対する敬愛の念、二人の作曲家の個性の違いを感じさせた。即興的な装飾音、弱音の表現が美しく、ウィーン古典派の典雅な世界に惹き込まれる。続いてハイドンの鍵盤作品の最高傑作とも言える最後のソナタ第52番。第1楽章の重厚な和音のテーマから華やかな響きを操り、壮大なスケールの演奏を繰り広げた。

後半は、モーツァルトのK570とK576。若き晩年の天才作曲家の最後の2曲のソナタには、天国に向かっているような突き抜けた明るさがあふれている。柔軟なタッチから生み出される色彩豊かな音色で、モーツァルトが最後に見た世界が鮮やかに描き出された。アンコールは、モーツァルト《グラスハーモニカのためのアダージョ》K356、そして、日本・オーストリア友好150周年にちなんで、J・シュトラウスⅡ世《酒・女・歌》。ベートーヴェン・ソナタ第280Vのウィーンナー・トーンを遊び心いっぱい

いにエレガントに響かせ、コンサートを締め括った。

終演後のインタビュで久元は、「今回は、ハイドンがモーツァルトに与えた影響、二人の作曲家が最後に到達した世界の違いを浮き彫りにしようと思いました。このシリーズの第2回から使用しているベーゼンドルファーモデル280VCは、ベーゼンドルファーが長年培ってきた木のぬくもりを感じさせる美しいウィーンナー・トーンの伝統を受け継ぎつつ、音の立ち上がりや速く、モーツァルト時代のフォルテピアノのような繊細さ、軽やかさ、音色の透明感を持っています。ダイナミック・レンジの幅も広く、コンチエルトを演奏する時には、オーケストラの音に埋もれず、輪郭のはっきりとした優美な音色で歌い、パワーを発揮してくれます。演奏者の想いを敏感に受けとめてくれる楽器だと思えます。来年はこのシリーズを休み、ペーターヴェン・イヤールに合わせて『モーツァルトとペーターヴェン』をテーマにしたリサイタル(2020年11月12日 紀尾井ホール)を開催しますが、その際には、『280VCピラミッドマホガニー』を使用します。マホガニーの木目を生かした美しい名器で、木のエネルギーや自然の風合いを直に感じながらモーツァルトとペーターヴェンを演奏するのが楽しみです」と語った。